

続文化は、
今に生きる

何なるわけにてか唯一人にて福の神に出で、処々をあるきて遅くなり、淋しき路を帰りしに、向の方より丈の高き男来てすれちがひたり。顔はすてきに赤く眼はかがやけり。袋を捨て、逃げ帰り大に煩ひたりと云へり。」

柳田國男著『遠野物語』と『遠野物語拾遺』から、正月一五日、小正月のはなしを拾う(『柳田國男全集第一 卷筑摩書房』)。

昼は人、この満月の夜は異界の者が、支配する世界だった。

遠野にて

深澤芳樹

「正月十五日の晩を小正月と云ふ。宵の程は子供等福の神と称して四五人群を作り、袋を持ちて人の家に行き、明の方から福の神が舞込んだと唱へて餅を貰ふ習慣あり。宵を過ぎれば此

「福の神やナミミタクリの他に、田植、畑蒔き、春駒など、小正月に行はれる行事の種類はまだ幾つもある。田植は女の子らが松葉を手に持ち、雪の上で田植の真似をして餅を貰つてあるく

「正月十五日の晩を小正月と云ふ。宵の程は子供等福の神と称して四五人群を作り、袋を持ちて人の家に行き、明の方から福の神が舞込んだと唱へて餅を貰ふ習慣あり。宵を過ぎれば此

「福の神やナミミタクリの他に、田植、畑蒔き、春駒など、小正月に行はれる行事の種類はまだ幾つもある。田植は女の子らが松葉を手に持ち、雪の上で田植の真似をして餅を貰つてあるく

のである。畑蒔きは、雪を鍬で畔立てして、よえとやら、さいとやえと歌つて餅を貰ひ歩く。又春駒と言ふのは、鈴を鳴らして家毎に白紙に馬を画いたのを配り歩き、是も餅を貰つて行く。」

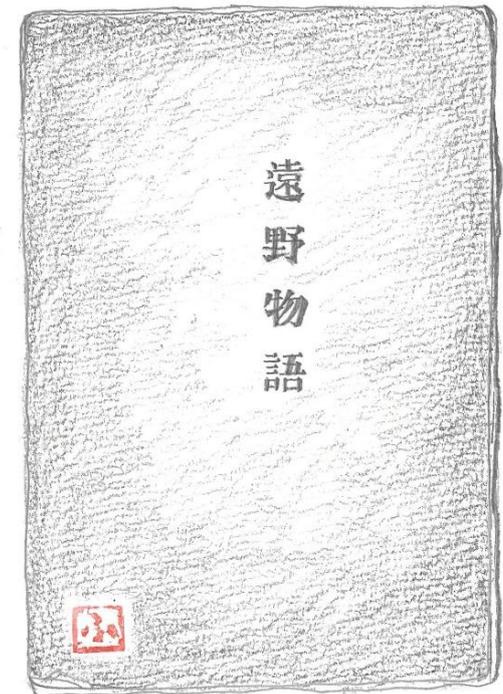
「田植踊も比日である。矢張り村吟味で家毎に人を出し、此夜は男女打揃つて踊り、笠揃ひを済ます。」

「小正月は女の年取りである。此日は家の中の諸道具も年を取る日であるから余処に貸してあつた物等も皆持つて来ておくやうにして餅を供へる。鍵に供へるのを、鍵鼻様の餅といつて、夜これを家族の者が食へれば丈夫に

なると思はれる程、不思議に沢山な鴉の群が何処からか飛んで来るのであつた。」

「小正月の晩には行事甚だ多し。月見と云ふは六つの胡桃の実を十二に割り、一時に炉の火にくべて一時に之を引上げ、一列にして右より正月二月と数ふる

「鴉呼ばりと言ふことも、小正月の行事である。柵に餅を小さく切つて入れ、まだ日のあるうちに、子供等がこれを手に持つて鴉を呼ぶ。村の彼方此方から、鴉来う、小豆餅呉るから来う。と歌ふ子供の声が聞えると、鴉の方でも此日を知つて居るのか



『遠野物語』初版本 (深澤芳樹画)

「又世中見と云ふは、同じく小正月の晩に、色々の米にて餅をこしらへて鏡と為し、同種の米を膳の上に平らに敷き、鏡餅をその上に伏せ、鍋を被せ置きて翌朝之を見るなり。餅に附きたる米粒の多きもの其年は豊作なりとして、早中晩の種類を扱ひ定むるなり。」

(日本考古学)